

國學院大學學術情報リポジトリ

冷戦後の日本総合雑誌における中国関連報道執筆陣 分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄭, 琳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001608

冷戦後の日本総合雑誌における中国関連 報道執筆陣分析

An Analysis of the Authors of China-related Articles in Japanese General Interest Magazines after the end of the Cold War

鄭 琳

キーワード：総合雑誌 中国関連報道 執筆陣 論調
关键词：综合杂志 涉华报道 执笔阵容 报道倾向

要旨

本稿では1993年から2012年の『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』に掲載された中国関連報道の主な執筆陣について考察した。統計と分析の結果、三誌の執筆陣は主に学者、記者、作家、評論家、シンクタンク研究員という五つの属性に集中しており、そのうち一人当たり4篇以上の寄稿者は主に学者と記者であった。よって、この時期の日本の代表的月刊総合雑誌の中国論をリードしていたのは学者と記者ということが分かった。

摘要

本论文针对1993年到2012年间的《世界》、《中央公论》、《文艺春秋》这三种综合杂志中有关中国报道的作者分布，进行了统计和分析。从统计、分析的结果可以看出，三种杂志的执笔阵容主要为学者（大学教授），记者，作家，评论家和智库成员这五个种类。此外，人均投稿数为4篇以上的，大部分为学者和记者。可以说，日本主流月刊综合杂志的对华认识，主要是由学者（大学教授）和记者所引领的。

1 はじめに

冷戦終結後、国際情勢は大きく変化し、中日関係は新しい歴史段階に突入した。摩擦と協調、競争と協力がこの時期における中日関係の基調となった。ではこの時期において、日本のメディアは中国のいかなる問題に注目し報道したのか。メディアは公共輿論を形成する手段の一種であり、その国の国民の相手国への認識形成に大きな影響を与えるだけでなく、両国間の関係にも一定の影響がある⁽¹⁾。

(1) 张玉：《日本报纸中的中国形象——以‘朝日新闻’和‘读卖新闻’为例》，中国传媒大学出版社

この疑問を解決するため、本稿では冷戦終結後の1993年から2012年に発行された日本の代表的総合雑誌に掲載された中国関連特集報道の執筆陣に注目し、中日関係のどんな話題が報道として取り上げられ、この時期の中国論はだれによってリードされていたのか考察した。

『広辞苑 第六版』によると、総合雑誌とは「政治・経済・社会・文化など広い分野についての評論や随筆・創作などを合わせて掲載する雑誌」である⁽²⁾。さまざまなジャンルを一誌で抱合する総合雑誌というジャーナリズム形式は日本特有のもので、外国には例を見ない。なお、雑誌の選定にあたっては、発行部数・影響力・論調などの要素をふまえたうえで『世界』（岩波書店発行）『中央公論』（中央公論新社発行）『文藝春秋』（文藝春秋社発行）の三誌とした。三誌はともに日本社会において代表的な月刊総合雑誌であり、それぞれの論調は「リベラル」、「中道的」、「保守的」と評価されている⁽³⁾。総合雑誌を通して日本輿論界を考察することはある程度限界があると自覚しているが、それでも筆者がこれを本論文の研究対象にした理由は、総合雑誌が学界と一般大衆をつなぐ重要な媒介だからである。近年では、発行部数の減少による採算割れにも関わらず前述の雑誌を始めとして、幾つもの雑誌がいまだ存続しており、少ない発行部数から影響力は限定されるが、市場の論理を超えた独自の「言論の場」を形成している。

2 各誌の中国論をリードする執筆陣と代表人物

アメリカの文化人類学者で日本研究家のハーバード・バッシンは、月刊総合雑誌の社会的効用について興味深い分析をおこなっている。「少し調べてみればすぐわかることだが、多くの読者は自分をインテリらしく見せるために総合雑誌を買う。総合雑誌を買うということは、読書上の選択というよりもむしろ一種の身分証明にちかい行為であることが多い」⁽⁴⁾。月刊総合雑誌は、いわば「人々の『教養』を満たした」、と思わせるものを含んでいるのである。総合雑誌の中国関連報道の執筆陣は、大学教員や評論家といった日本社会において著名な高学歴の

2012年版、第4頁。

(2) 岩波書店編『広辞苑 第六版』、岩波書店、2008年、429頁。

(3) 佐藤都「日本の総合雑誌3誌の数量・内容分析からみる日本人の中国に対する関心の変遷」、『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』、2012年3月、100頁。

(4) 加藤秀俊「総合雑誌に注文する」、『中央公論』、1960年11月号、94頁。

人々（知識人）である。こうした知識人が総合雑誌に原稿を寄稿する目的は日本社会に対する啓蒙にあり、そうした原稿の内容には日本社会の中国認識が投影されていると見てよいだろう。

そして、一般読者は通常、総合雑誌に掲載されている記事を読む際、その表題だけでなく、その著者にも注目する傾向があるといわれている⁽⁵⁾。そこで、三誌の主要執筆者について掲載本数の数値と属性別の寄稿比率を統計し、代表的な人物について分析を行った。なお、本稿では単独署名の寄稿についてのみ統計対象とし、座談会や対談といった多人数にわたるものは対象外とした。

2.1 『世界』の主要執筆陣および代表的人物

表1：『世界』に4編以上寄稿した執筆者のリスト（1993～2012年）

番号	作者名（肩書は雑誌掲載時のもの）	寄稿数
①	朱 建 栄（東洋学園大学教授 / 中国政治外交史、現代史）	14
②	莫 邦 富（フリージャーナリスト）	13
③	本 田 善 彦（フリージャーナリスト）	8
④	辻 康 吾（東海大学教授、元毎日新聞記者 / 中国政治論）	6
⑤	孫 歌（中国社会科学院文学研究所研究員） 野田正彰（評論家、京都女子大学教授 / 比較文化精神医学） 小倉エージ（料理・音楽評論家、香港文化研究家）	5
⑥	若林正丈（東京大学准教授 / 中国近現代史） 高原明生（立教大学教授 / 現代中国政治、東アジア国際政治） 小林英夫（早稲田大学教授 / 東アジア経済論、植民地経済史） 塚本元（法政大学教授 / 近代中国政治外交史） 寺島実郎（三井物産戦略研究所所長） 田畑光永（TBS 記者） 田村秀男（日本経済新聞記者） 岡田充（共同通信客員論説委員）	4

*本表は筆者が1993～2012年の『世界』各号の中国関連報道をもとに統計・作成。

表1からわかるように、『世界』の中国関連報道の執筆陣は主に現代中国を研究分野とする学者と記者から構成されている。

(5) 馬場公彦『戦後日本人の中国像』、新曜社、2010年、403頁。

『世界』の執筆陣の特徴の一つは、中国人の寄稿数が非常に多いことである。寄稿数が最も多いのは朱建栄と莫邦富で、二人とも長期にわたりコラム欄を持っており、寄稿内容からもなるべく客観的に中国のことを日本に伝えたいという努力がうかがえる。朱建栄は1957年に上海で生まれ、1996年から東洋学園大学で教授をつとめ、2003年からは在日華人教授会の代表も務めている。朱建栄が『世界』に寄稿した文章は、具体的には「日本から見る中国、中国から見る日本」(『世界』1994年8月号)、「中国はどのような東アジア共同体をめざすか」(『世界』2006年1月号)、「上海万博から見る中国」(『世界』2010年9月号)などがある。総合雑誌以外にも、テレビ番組の評論員などを担当するなどメディアでの露出が多く、中国政府の政策や対日関係について発言することから、一般的には朱建栄は中国政府の日本での代弁者だと認識されている。

日本人の執筆者で最も寄稿数の多い二人はフリージャーナリストの本田善彦と元毎日新聞記者の辻康吾である。本田善彦は1966年生まれで、かつて台湾国際放送の前身「自由中国の声」の記者兼アナウンサーとして中国広播会社に所属していたが、その後独立しフリージャーナリストになった。そのような経歴もあって、本田善彦の『世界』での寄稿は、「米中接近、六者協議と台湾」(『世界』2004年1月号)、「馬英九政権誕生で転換期を迎える日中台」(『世界』2008年5月号)など、中国大陸と台湾及び日本について言及しているものが多い。辻康吾は1934年生まれで、かつて毎日新聞の記者として北京での滞在歴が長く、中国通ともいえる人物である。『世界』への寄稿は、「中国の外交戦略」(『世界』1993年11月号)、「中国対外政策の決定過程」(『世界』2010年12月号)などがあげられる。このほかにも中国の政治学術書の翻訳に力を入れており、嚴家其・高崧の『文化大革命十年史』、高文謙の『晩年の周恩来』を翻訳し日本に紹介した。

『世界』で活躍する代表的な日本人学者は野田正彰である。1994年生まれの野田正彰は北海道大学医学部出身で、神戸外国語大学・京都女子大学・関西学院大学などで教鞭をとった。研究分野は比較文化精神医学である。野田正彰が『世界』に寄稿した文章には、「七三一部隊の跡」(『世界』1995年10月号)、「陳真一戦争と平和の旅路」(『世界』2004年3月号)などがあげられる。また、1998年に岩波書店から『戦争と罪責』を出版した。本書はかつて中国を侵略した年老いた日本軍をインタビューしたもので、個人の罪の意識と反省意識を重視しており、戦争責任認識に対する理解を深める重要な史料であると言える。

2.2 『中央公論』の主要執筆陣および代表的人物

表2：『中央公論』に4編以上寄稿した執筆者のリスト(1993～2012年)

番号	作者名(肩書は雑誌掲載時のもの)	寄稿数
①	朱 建 栄 (東洋学園大学教授 / 中国政治外交史、現代史)	19
②	濱 本 良 一 (読売新聞中国総局長)	9
③	岡 崎 久 彦 (博報堂顧問) 佐 藤 優 (作家、元外務省主任分析官)	8
④	茅 原 郁 生 (防衛研究所アジア地域研究室主任) 遠 藤 誉 (筑波大学名誉教授 / 物理学、社会学)	6
⑤	莫 邦 富 (フリージャーナリスト) 田 中 明 彦 (東京大学教授 / 国際関係論) 白 石 隆 (政策研究大学学長 / 東南アジア地域政治) 渡 辺 利 夫 (拓殖大学学長 / 開発経済学、アジア経済論) 八木澤高明 (フォトグラファー) 中 島 恵 (フリーライター)	5
⑥	沈 才 彬 (三井物産貿易経済研究所主任研究員) 櫻 田 淳 (評論家、東洋学園大学専任講師 / 国際政治学、安全保障) 田 中 直 毅 (政治評論家、21世紀政策研究所理事長) 加 藤 徹 (明治大学教授 / 中国文学、中国戯曲) 原 田 曜 平 (マーケティングアナリスト)	4

*本表は筆者が1993～2012年の『中央公論』各号の中国関連報道をもとに統計・作成。

表2からわかるように、『中央公論』の中国関連報道の主な執筆陣は学者と記者以外にも元政府官僚、シンクタンク研究員など、執筆者の属性が多様化しているのが特徴的である。

『中央公論』の執筆陣でも、中国人の姿が目立つ。ここでも寄稿数が最も多いのは朱建栄(「社会主義市場経済は砂上の楼閣か?」、『中央公論』1994年1月号)である。また、莫邦富(「“NOといえる中国”現象の意味」、『中央公論』1997年1月号)と三井物産貿易経済研究所主任研究員の沈才彬(「日本モデルと決別した中国」、『中央公論』1998年10月号)も寄稿数が多い。

日本人作者のうち最も寄稿数が多いのは読売新聞の濱本良一である。1952年生まれの濱本良一は東京外国語大学出身で、かつて読売新聞に記者を務めており、10年以上にわたる中国での滞在および取材経験があり、日本の新聞界の中国通としてよく知られている。定年後は国際教養大学で教鞭をとっている。濱本

良一が『中央公論』に寄稿した文章には、「反戦・主戦でわれた中国ネット論壇」(『中央公論』2003年6月号)、「指桑罵槐”真の狙いは台湾と安保理 中国は再び反日デモを仕掛けてくる」(『中央公論』2005年7月号)などがあげられる。中央公論新社は1999年に読売新聞社に合併されたので、読売新聞の記者が『中央公論』への寄稿が多いのは不自然なことではない。

日本政府関係者の作者代表としては岡崎久彦があげられる。岡崎久彦は1930年生まれで、サウジアラビアとタイで特命全権大使を歴任し、また外務省で情報調査局長を務めた。定年退職後は保守・現実派の外交評論家として活動し、安倍晋三首相の外交ブレーンとしても知られた。14年10月に死去。岡崎久彦の『中央公論』への寄稿は「中国よ、日本の教訓に学べ 政府主導のナショナリズムほど危険な存在はない」(『中央公論』2004年9月号)、「中国外交硬直化の背後に垣間見える軍の影」(『中央公論』2005年8月号)などがある。

日本人学者で寄稿数が多いのは筑波大学名誉教授の遠藤誉である。1941年生まれの遠藤誉は幼少期を中国で過ごしたため、中国に事情をよくわかっており、社会学の観点から中国両国に対す社会的評論を寄稿した。具体的には、「新抗日戦争に燃える青年たち 胡錦濤も手を焼く“憤青”の実態」(『中央公論』2005年8月号)、「中国の成長に水を差す大学生の就職難」(『中央公論』2006年9月号)などがあげられる。

また、『中央公論』の特徴の一つは、シンクタンク研究員の寄稿が比較的多い点である。代表的な作者は防衛研究所アジア地域研究室主任の茅原郁生である。1938年生まれの茅原郁生は防衛大学校出身で、陸上自衛隊で陸幕戦略情報幕僚、連隊長、師団幕僚長、防衛研究所研究部長などを歴任した。『中央公論』への寄稿は「資源だけが目的なのではない 中国の海洋進出、その軍事的意図」(『中央公論』2004年10月号)、「中国の国防近代化とアジアの緊張—全人代報告と2004年国防白書から」(『中央公論』2005年5月号)などがあげられる。

2.3 『文藝春秋』の主要執筆陣および代表的人物

表3からわかるように、中西輝政や石原慎太郎などごく少数の例外以外、『文藝春秋』の執筆陣はほとんどが各新聞社と記者とフリージャーナリストによって構成されている。

寄稿数が最も多いのはフリージャーナリストの富坂聡である。富坂聡は1964

表 3 : 『文藝春秋』に 4 編以上寄稿した執筆者のリスト (1993～2012年)

番号	作者名 (肩書は雑誌掲載時のもの)	寄稿数
①	富坂 聡 (フリージャーナリスト)	28
②	城山 英 巳 (時事通信社記者)	9
③	中西 輝 政 (京都大学教授 / 国際政治学、文明史) 古森 義 久 (産経新聞記者) 加藤 隆 則 (読売新聞上海支局長)	7
④	田中 信 彦 (フリージャーナリスト) 上村 幸 治 (毎日新聞前北京支局長) 石原慎太郎 (作家、東京都知事)	5
⑤	平平川祐弘 (福岡女学院大学教授 / 比較文学)	4

* 本表は筆者が1993～2012年の『文藝春秋』各号の中国関連報道をもとに統計・作成。

年生まれで、北京大学での留学経験がある。かつては『週刊ポスト』『週刊文春』の記者だったが、2002年に独立してフリージャーナリストになり、2014年からは拓殖大学海外事情研究所の教授となった。富坂聡の『文藝春秋』への投稿は主に在日中国人の犯罪状況、中国の地下経済や中国人民解放軍の内幕に関するものに集中している。具体的には、「在日中国人犯罪白書」(『文藝春秋』2001年10月号)、「靖国神社は中国の人質か—小泉 vs 財界・胡錦濤の内幕」(『文藝春秋』2005年1月号)などがあげられる。

『文藝春秋』の執筆陣のうち、学者代表として中西輝政をあげられる。1947年生まれの中西輝政は京都大学の教授で、研究分野は国際政治史、文明史である。保守派の中西輝政は安倍晋三首相のブレーンの一人であり、中国に対して批判的で、『文藝春秋』以外にも『正論』、『諸君!』、『VOICE』、『WILL』で数多くの時事評論を発表した。『文藝春秋』への寄稿は「世界の敵中華帝国は必ず滅びる」(『文藝春秋』1999年6月号)、「日本企業よ、黄河の呪いから覚めよ—反日を叫ぶ暴徒はなぜ笑みを浮かべているのか」(『文藝春秋』2005年6月号)などがある。

代表的な新聞記者の寄稿者として古森義久をあげられる。1941年生まれの中古森義久はかつて産経新聞ワシントン駐在客員特派員をつとめ、産経新聞の第一任駐中国総局長であった。北京駐在中はおもに中国の軍備増強、日本の対中ODAの詳細や中国の反日歴史教育について報道していた。「中国脅威論」の主要論者の一人でもあり、古森義久の寄稿は「胡錦濤「靖国非難」は世界の非常識—米国もア

ジア諸国も中国の靖国反対を相手にせず」(『文藝春秋』2005年8月号)、「[ザ・レイプ・オブ・南京]映画の罨一“事件”から七十年。反日に沸く中国ネットワークの動き」(『文藝春秋』2007年4月号)などがあげられる。

この他に、作家で東京都知事の石原慎太郎も寄稿数が多い執筆者の一人である。1932年生まれ、石原慎太郎は一橋大学法学部出身で、1968年に参議院議員になり、その後三期にわたり東京都知事を務めた。『文藝春秋』への寄稿は「日中激突 ノーといえるのはどっちだ」(『文藝春秋』1997年11月号)、「北京五輪を断固ボイコットせよ」(『文藝春秋』2005年6月号)などがある。

3 三誌における執筆陣の属性比率と特徴の比較

表4は三誌に4篇以上寄稿した執筆陣を、職業の属性別に分類しその寄稿数を統計したものをまとめた結果である。前述の内容ともあわせてみると、『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』の執筆陣と三誌の論調の間には密接な関係があることがわかる。

表4：三誌執筆陣の属性別寄稿（4篇以上）統計（1993～2012年）

雑誌名	学者	記者および フリージャーナリスト	作家	評論家	シンクタンク 研究員	総人数 (寄稿総数)
世界	7	5	0	2	1	15 (88)
中央公論	6	4	2	1	4	17 (106)
文藝春秋	2	6	1	0	0	9 (77)

*本表は筆者が1993～2012年の三誌各号の中国関連報道をもとに統計・作成。

上の統計データが示しているように、『世界』の中国関連報道では主に学者と記者が存在感を示している。『世界』で活躍している学者の研究分野を見ても、歴史学出身が比較的多く、これらの学者の言説も日本の戦争責任を認め、中日友好を強調するものが多い。記者も多くは『毎日新聞』など中国に対し比較的友好的な新聞社の顔ぶれからなっている。寄稿した評論の内容及び論調から言えば、執筆陣の多くはリベラル派で、『世界』の論調傾向がなぜ中国に対し比較的客観的で友好的なのかがよくわかる。『世界』の中国関連報道は論文や論評が多く、学術性と

客観性を重視している。また、『世界』の一つの重要な特徴として、中国人の執筆者が活躍していることがあげられる。朱建栄や莫邦富のコラム以外にも、よく中国の著名学者、作家や映画監督に対するインタビューが掲載される。このことから、『世界』が全面かつ客観的に中国のことを理解したいという姿勢がうかがえる。日本人寄稿者の中国論説も中立的客観的な論説が多い。例えば、2005年4月から5月に中国起こった反日デモに関しても、『世界』は国民感情などの角度から分析し、中国に対し十分な理解を示し、中国の反日感情に関し過度に強調することはなかった。歴史問題に関しても、『世界』は中国に対し友好的で、日本の侵略戦争が中国に対し災難をもたらしたことを反省するスタンスに立っていた。ただ、『世界』のこのような論調は、保守化が進んでいる今日の日本ではかなりの少数派といっても過言ではない。

『中央公論』の主な執筆陣のうち、学者の数は一番多く、重要な役割を果たしている。学者以外では記者やシンクタンク研究員も活躍している。執筆陣はリベラル派に保守派と、多岐にわたる。『中央公論』は元は比較的中立的な論調だったが、のちに読売新聞に合併されてからは保守色が増した。『中央公論』にも中国人の寄稿は比較的多く、中国の各種現状をなるべく客観的に伝えようとする努力が見られる。日本人寄稿者の論調は保守的で、現実的なものが多い。主な見解としては、例え中国と摩擦や矛盾があっても、両国間の経済的利益を考えれば協力すべきであるというものが多い。このような観点は寄稿者の研究分野が経済学出身者が比較的多いこととも関係していると考えられる。『中央公論』は中国のことをなるべく正確に報道しようとする一方で、日本の国益をとっても重視しているのが特徴的である。この複雑な態度は中国の反日デモ関連報道にもよくあらわれている。『中央公論』は中国が日本の常任理事国入りに反対していることや、中国政府の向心力低下を批判する一方で、小泉政権の対中政策や靖国神社参拝には反対し、両国関係を改善すべきだと呼びかけた。また、『中央公論』のもう一つの特徴は、アメリカが中国と中日関係をどのように分析しているかに関心を持っていることである。このことは、『中央公論』がよく『Foreign Affairs』誌の米国学者や記者の論文を転載していることから、よくわかる。

『文藝春秋』の執筆陣の主な特徴は、学者の寄稿は極端に少なく、主にフリージャーナリストと記者の存在感が強いことである。執筆陣はどの属性にしても、ほぼ保守派によって構成されている。記者の多くは産経新聞など中国に対し批判

的な新聞社所属で、フリージャーナリストに至っては読者の注意を引くため、過激な表現や煽動的な報道が多い。

『文藝春秋』は『世界』や『中央公論』と比べ、学術性よりはエンターテインメント性が強いのもこうした傾向を助長している。『文藝春秋』の執筆陣に中国人の姿は見られず、中国やアメリカが中日関係をどう考えているかまったく関心を持っていない。寄稿原稿の題材も論文や論評が多い『世界』や『中央公論』とは異なり、『文藝春秋』の中国関連報道は記者のルポライトが多く、主観的で中国を批判する内容となっている。例えば、中国の反日デモ報道や両国の歴史問題に関しても、ほとんどが中国政府や中国社会を批判する論調である。『文藝春秋』の論調は自国本位の立場に立ち、中国に対し否定的で批判的な見方をしているのが特徴である。しかし、このような論調は日々右傾保守化が進む現代の日本社会では主流の見解であり、この傾向は『文藝春秋』の発行部数が他の二誌より圧倒的に多いことからよくわかる。

このように、総合雑誌にて活躍する代表的な執筆陣は、各誌のスタンスや論調と密接に関係していることがわかる。販売部数の伸張を目的とする商業媒体である月刊総合雑誌は、読者の声を無視することはできないはずであり、各雑誌の編集部は、各雑誌が寄って立つ読者層を意識しながら、読者の中国に対する認識と共鳴する執筆者を選定しているはずである。そして、こうした三誌執筆陣の違いは、雑誌の中国関連報道の論調にも影響をもたらした。全体的に見て、この時期の『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』の中国論は、主に学者と記者によってリードされていることが分かる。ただ、学者でも専門とする研究分野の違いにより、中国に対する論調は異なる傾向が強い。傾向としては、中国文学や歴史学を研究する学者の論調は中国に対し友好的で、国際関係や政治・経済を研究する学者の場合は論調が中国に対し批判的であったり、懐疑的であったりすることが多い。

4 おわりに

以上のように、本稿では1993年から2012年の『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』に掲載された中国関連報道の主な執筆陣について考察した。統計と分析の結果、三誌の執筆陣は主に学者、記者、作家、評論家、シンクタンク研究員という五つの属性に集中しており、そのうち一人当たり4篇以上の寄稿者は主に学者と

記者であった。よって、この時期の日本の代表的月刊総合雑誌の中国論をリードしていたのは学者と記者ということが分かった。ただ、雑誌により学者と記者どちらがより活躍していたかには違いがある。

また、各誌に掲載された中国関連報道は主に政治、経済、外交、歴史の四つの分野に集中しており、これは三誌が知識層を対象とし発行しているからだと考えられる。また、多くの日本メディア研究者も指摘しているように、中国関連報道は「日本との関係の有無」が報道価値の標準となるゆえ⁽⁶⁾、必然的に両国が密接なかかわりを持つ分野に話題が集中する。全体的に見て、左よりの論調傾向である『世界』は中国に対し友好的で、中道的な『中央公論』は(日本の)国家利益至上主義、右よりの『文藝春秋』は中国を悪者だと認識していた。そして、三誌で活躍する執筆陣の構成や各誌の中国論をリードする研究者の顔ぶれと論調をみても『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』がなぜりべらる、中道的、保守的という風に認識されているのかうなずける結果となった。

参考文献

- [1] 岩波書店. 世界. 岩波書店, 1993年1月-2012年12月各号.
- [2] 中央公論新社. 中央公論. 中央公論新社, 1993年1月-2012年12月各号.
- [3] 文藝春秋社. 文藝春秋. 文藝春秋社, 1993年1月-2012年12月各号.
- [4] 馬場公彦. 現代日本人の中国像. 新曜社, 2014年.
- [5] 馬場公彦. 戦後日本人の中国像. 新曜社, 2010年.
- [6] 段躍中編. 日中対立を超える「発信力」～中国報道最前線 総局長・特派員たちの声～. 日本橋報社, 2013年.
- [7] 佐藤都. 日本の総合雑誌3誌の数量・内容分析からみる日本人の中国に対する関心の変遷. 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 2012-03.
- [8] 杨栋梁主编, 田庆立、程永明著. 近代以来日本の中国観 第六卷(1972-2010). 江苏人民出版社, 2012年.
- [9] 张玉. 日本报纸中的中国形象. 中国的传媒大学出版社, 2012.
- [10] 刘林利. 日本大众媒体中的中国形象. 中国传媒大学出版社, 2007年.
- [11] 张宁. 日本媒体上的中国 报道框架与国家形象. 吉林人民出版社, 2006年.
- [12] 张广宇. 冷战后日本的新保守主义与政治右倾化. 北京大学出版社, 2005年.
- [13] 吕耀东. 冷战后日本的总体保守化. 中国社会科学出版社, 2004.
- [14] 崔世广. 中日相互认识の現状、特征と課題. 《日本学刊》, 2011年第6期.
- [15] 刘继南、何辉等著. 镜像中国—世界主流媒体中的中国形象. 中国传媒大学出版社, 2006年.

(6) 张宁：《日本媒体上的中国 报道框架与国家形象》，吉林人民出版社2006年版，第34页。